
underground journey

ame*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

u n d e r g r o u n d j o u r n e y

【Nコード】

N 5 6 2 2 I

【作者名】

a m e *

【あらすじ】

世界との境界領域を越えて滲入してくる暗い夢。

一時ファイルに収納されている半過去はあなたの汚点かもしれない。しかし、その流出を危惧してもそのようなものはごく小さな問題に過ぎないので。すでにハイパーエシユロンのデータベースに侵入した「影」は、そこからあなたのすべてのスキャンダル、そしてあなたのひだひだの奥の鮮明な画像までも自らのコンピュータのハードディスクに転送してしまいました。あなたが王子様にメールで送った、あなたの内臓の中に嘔吐臭の気体といっしょに溜まっていた性衝動や、それが暗号化されたファイルであるところの権力への意志という代物にしても同様です。また、更に恐ろしい事実もあります。あなたのサブプリミナルに送り込まれたトロイの木馬はすべての思念を「影」のもとに送信しているのです。あなたはアラートのメッセージがでたことに気づきませんでしたね。もう修復は不可能でしょう。すべてを恢復させるためには人類の集会的無意識へのクラッキングが必要です。

……僕はこれからどこかへ出かけるのだろう
部屋の中央に立って僕は考える　世界は何だか狭くて直径が10メートル程度しかないような気がする　その世界の中の階下で母親が何か言っているのだが音声はオフになっている　その母親は僕が生まれた時から知っている母親とはまったく別の容姿や話し方なのだが今ここでは僕の母親に違いないのだ　僕の出かけて行く先は仕事なのかボランティア的な手伝いなのか　でもたぶん湾岸のほうへ行くのだ　これから行く場所から最寄のターミナルに戻るには深夜12時のバスが最終だから11時40分には向こうを出ないと帰れない　僕は今そんなことを考えているようだ　もうすぐ僕は出かけるのだろう……

子供の頃、シャツのいちばん上のボタンを掛け違えたこと。それが、そのあとのすべてがエラーになっている原因だ。また、そのことがすべての異和の起源であり、時空には致命的な歪みが生じた。コントロールを失った生は世界の果てに漂流して行く

この領域には

あなたの悲しみを癒したり

あなたの苦痛を和らげたり

あなたを絶望の淵から救い上げたり

あなたを力づけたり

そういったことを期待する対象としての

いかなるものも存在しません

……僕は楽器店へ入った　ハーモニカを買おう
と思っ　たらしい　もし最終バスに遅れてどこかで夜をあかさなければならなくなったら海辺の大きな岩と岩に挟まれた砂洲でハーモニカを吹いてみよう　もしずっと一人でいられたらそれは至福の時だ
でも誰かがぼくを見つけて話しかけてくるだろうか　そんな時間のそんな場所でも世界の隅々まで必ず人間がいて街の中でやたらと見知らぬ人に話しかけたらちょっとビョーキかと思われてしまうからそういう奴はごくまれにしかないが人気のない場所ではそうでもないのか　いやそういう場所でもやっぱりそういうことをする奴には異常な匂いがするだろうがとにかく街の中より遥かにそういう行動を押しとどめる要素が減少するらしく無遠慮に短絡的な行動に出てくるものなのだ　僕はそんなことを考えていたらしいがふいに近くの空間に出現した小太りの男が話しかけてきて彼は店員という

わけではないようだがハーモニカに関する知識はそこそこにあるようだった。もちろん彼の話す内容など記憶していないというより記憶する以前の聴覚による認識を遮蔽しているのだ。間断なく喋る口元に目をやると10ホールのハーモニカが口腔の中にすっぽり入っているのが見える。実はその男にとってハーモニカに関する話題はどうでもいいのだ。ただ喋りつづけることが目的で10ホールのハーモニカをもっているからといってブルースやフォークに造詣が深いわけではない。たぶんその男はその10ホールで子供の頃音楽の授業で覚えた曲でも吹くのだろう。陳列ケースの棚の間の空間から店員が現れる。ハーモニカ男はべつにそれを奇異なこととは思わないうで少しも態度を変えないことがない。それで僕も儀礼として特に驚いた様子は見せないことにする。店員は僕にさまざまな種類のハーモニカを見せて詳細な説明をするが、それは売上向上のためというよりは説明することが自己目的化しているように感じられる。はじめ店員の説明に合わせて相槌を打っていた男は気がついたら姿を消している。ほんとうに消えてしまったのだ。僕はそれ以上説明を聞くのがうんざりだったので結局最初に手に取ってそのまま持っていたやつを買うことにする……

「神」は世界の外に存在するものです。だからこの世界の隅々まで探しまわっても、それは、あなたに疲労と絶望感を残すだけでしょうね。しかし、ネガティブな超越的存在だったら確実に棲息しておりますよ。時空の歪みの裏側に生じる間隙を拠り所として、その存在と信徒の小人たちはたしかに日々呼吸し飲食し、性行為を含めた排泄も忘れずにちゃんと行っているのです。彼らの一部が、たとえ巨人であっても小人は小人ですからお忘れなくね。ただその存在の信徒たちはひたすら、あなたが質量からの絶対自由を獲得することがないように、つまりコンセンションの状態に入るのをを妨げることに日夜、精を出しています。世界はそれがあるいは仮想のも

のであるにしろ、自由意思の存在によって成立していますからね。そのものたちには何を言っても無駄なのです。働き蜂と女王蜂では見る夢の領域がまったく異なるように、想像力の領域外、限界というものは厳然として存在しているのです。えらそうにもつともなことを言つて、一見、能力があるようなものがあるかもしれないが、彼はそれまで受けた訓練と習得した技術と知識によって、実は最後の段階をクリアする資格を喪失していることでしょう。

・・・・・・僕はやるべきことをすべてやってしまったらしいので建物の中の通路をあちこち歩いてみる いやそれは誤りだったろうか 高校生に見えるバイトの男の子にまだ仕事が残っていて彼にどういうわけかつきあって一緒にいるのだったかもしれないとにかく時計を見るともう11時50分だったので最終バスには間に合わない 僕は運河沿いを歩き埋立地の荒野の細い道を歩き岩と岩に挟まれた砂洲の見えるところまで行ってみるが何かあまりいい雰囲気を感じなかったので引き返した そして歩いているのは区画整理された広大な地域で水銀灯に照らされて明るい4車線の道路を通る車はまったくない ここには初めて来たのだが少し先に終夜営業の喫茶店があることを何故か僕は知っていて歩いて行くとその店は薄暗いが営業しているようだ ドアの向こうにはフロントがあってその様子は何かラブホテルを思わせるのだがたしかそこは喫茶店のはずだ 僕は入店の手続きをしたようだがその後なんの反応もない状態がしばらく続いていてそれがあまりにも長いので僕はドアを開いて外に出ようと思う すると薄暗い店内から女の声がかかります コーヒーをご注文いただきましたが今ならキャンセルできますどうしますか 僕は答を曖昧にしたまま一步踏み出すとそこは地下鉄の駅だ それはいつだったか夢の中で来たことがある世界のようなと思う いやそれに間違いない そのいつかの夢の中の出来事は目覚めた時には忘れてしまっていたのだが その記憶が今甦ったという

ことは その世界は僕の意識の外にある間も何処かにずっと存在しつづけていたということだろう その世界では湾岸地域の南北数ブロックごとに4本の地下鉄が通っていて それらはすべて終点の駅で東海道線に繋がっているのだが その駅名はリアルな世界には存在しないものようだ いやそれは名称としては明らかに存在するがコトバとしては不定形なのだ とにかく僕はもうその終点の駅のホームに立って その先へ行く東海道線の列車を待っているが しかしやって来た列車に乗ったところで行くあてがないことに気づいたので3本ほどやりすごす さっきまでは手ぶらだったのになぜか荷物を三つほど持っている でもその荷物はそこに置いたままにして僕は引き返すことにする 数歩戻るとそこはあの喫茶店のフロントだ僕はキャンセルはしないことを告げると人影はないが奥へどうぞという声がする 歩きながら行き先を透視すると暗い澱んだ空気の部屋で そこはホモたちの出会いの場なのかもしれない 生まれかけた不安な気持ちはでもはつきりと認識される前に失われていく そうだね すべてはもうすぐ消え去るのだ それは周囲の空間がしだいに希薄化してきたことによってわかる 数秒後に夢は終わり僕は眠りから醒めるだろう……

要するに、世界の構造は合わせ鏡と入れ子細工と対称形によって成り立っているということです。それが解明された時、星間物質の中にエラーメッセージが表示され、ヒトDNAのプログラムは動作を停止しました。いずれ彼たち及び彼女たちは解離の刑に処せられることになります。これは、あなたに救いを与えるために言っているわけではないので感謝には及びません。地下世界の太陽は遙かな下方でつめたく輝いています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5622i/>

underground journey

2010年10月10日11時39分発行